

# 『ため池文化《香川》』

## 融通の智恵』

平成6年大干ばつ 何が都市を救ったか



「日本文化は、水を仲立ちにした人と大地との営みの結果である。」そう、私は新著『水と緑の国、日本』（講談社）に書きました。それほどに日本文化の、他の諸文化と異なる特徴はといえば、水との緊密な関係です。水にまつわる独特の言葉だけでも、何と多いことでしょう。水に流す、水をあける、水争い、水掛け論、水臭い、寝耳に水、水をさす。どれも外国語には訳せません。なぜでしょう。水に恵まれているからでしょうか。水の豊かな国ならたくさんあります。では稲作文化だからでしょうか。そうには違いないが、ただ米を作るだけなら、アメリカでもヨーロッパでも作っています。

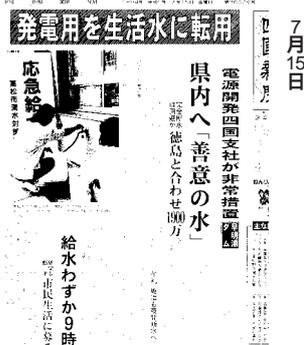
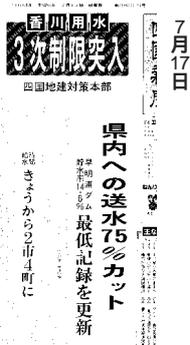
そうではなくて、水をめぐる緊張関係の文化、緊張関係によって共同体が生まれ、緊張関係によって初めて共同体の秩序も維持される社会、それが日本文化だったので。対自然との緊張関係であり、また人間社会内部の緊張関係。例えば上流対下流、対岸対こちら側、隣の田圃対うちの田圃、といった関係です。

それこそは地形急峻、雨の偏って降るきわめて特殊な自然条件下、水をコントロールして稲作を営むことで養われた特質、自然とのつきあいの知恵だったので。（注1）けれどいま、緊張関係は薄れ、水とのつきあいの知恵や伝統は忘れられつつあります。

蛇口をひねれば水の出て来る現代社会に、昔の知恵や伝統など無用の長物なのでしょうか。例えば水不足の時、決まって都市から出されるのが、こんな声なのです。

「農業用水の慣行水利権なんてもう古い。そんなもの見直して、水を都市へ回せ」と。果たしてそうでしょうか。

1994（平成6）年は歴史的な渇水でした。いわゆる「平六渇水」です。とりわけ香川県の水不足は深刻で、「早明浦ダムの貯水量何パーセント」といったニュースが、連日のようにテレビで全国に報じられたものでした。高松市は五時間給水を実施し、市民の大



騒ぎぶり、苦労ぶりも全国に報じられました。しかしこのとき、高松市民を救ったその命網とは、実は農業用水から分けて貰ったものであったこと、農民が都市に水を分けたその陰では、農民の涙の出るような犠牲があったことは、あまり知られていません。しかもその犠牲を行うことが出来たのは、過去の伝統や知恵を、復活させたからこそであったのです。

というのは、農家が水を都市へ分けるためには、各農家がよほど足並みを揃えて節水し、同時に、厳しい配水管理をそれぞれ二十四時



## 香川用水とため池

香川県は昔から水資源に恵まれず、先人達が多くのため池を築造するなど、用水確保に苦労を重ねてきた(注4)。こうした問題の抜本的な解決を図るために、四国の水資源の総合的な開発を目的とした「吉野川総合開発」の一環として計画、施行された事業が香川用水である。吉野川上流の高知県長岡郡本山町に早明浦ダム(有効貯水量2億8,900万t)が建設され、その運用によって新たに生み出される年間8億6,300万tの用水が四国4県に配水され、そのうちの2億4,700万tを香川県に導入するという一大事業であった。早明浦ダムから放流された水は、吉野川中流部の池田ダム(徳島県)に設けられた取水口を経て、ここから阿讃山脈を貫く導水トンネル(全長8km)で県内に導かれることになる。ここから県を東西に横切り、その長さは約90kmで、香川県のほぼ全域を潤している。1968(昭和43)年に着工され、1981(昭和56)年に完成した。維持管理は、共用区間を水資源開発公団が、農業専用区間を香川用水土地改良区が担当している。これにより、長い水不足の歴史に一応の終止符が打たれと言われた。



間体制で行わねばなりません。普通ならとても考えられないような苦労が、混乱もなく整然と実現できたのは、『慣行水利権』(注2)に基づく配水ルール」という、その土地土地の水とのつきあい方の伝統を記憶していたお年寄りたちが、若い人たちに伝え、指導したからだったのです。

残念ながらこういうことはマスコミも報道しません。かえって「水が都市へ回せたのは、農業用水が余っていたからだ」とさえ報道する始末です。その根底には、いかにして農業用水を取り

上げるかが、都市の水行政の戦前からの重要テーマだったのです。(注3)

都市の私たちはいったいに誰に養われているのだらう。そんな謙虚さに立ち、古い伝統や知恵をいまのうちに何って、後世に伝えていく必要があるんじゃないか。そう思って私は、このとき節水の総元締めとして苦心され、いわば古い慣行や知恵の窓口でもあった香川用水土地改良区事務局長の長町博氏をお訪ねし、お話をうかがいました。

(1) 富山和子『水と緑の国日本』 講談社 1998年

(2) 慣行水利権はいわゆる「権利」ではなく、「財産」である。「二〇〇年からの権利なども古い。慣行水利権を見直して都市へ回せ」という議論も、「おまへの家や土地は先祖代々のもの。何百年も昔の財産など現代に通用しない。我々によこせ」というに等しい。

(3) 富山和子『水の文化史』 文藝春秋 1980年

(4) ため池の数は約16000あり。これは、兵庫県、広島県に次ぐ多さである。また、ため池は治水機能も持っている。例えば、丸亀市は土器川と金倉川に挟まれているが、洪水路線に沿って発達したため池が、洪水調整機能を果たし、丸亀市街地を洪水から守っている。

# 今世紀最大の大水

富山 長町先生、平六濁水では大変な苦勞をされましたね。高松市の水不足があれだけ全国に報道されながら、そのかげで市民を救うため、農家がどんな苦勞をされたか知らされていない。これはとても残念で、都市の私たちにとても不幸なことだと思つたのです。

そればかりか最近になつても、朝日新聞が「農業用水を都市へ回せたのは、水が余つていたからだ」と社説で書きました（1998（平成10）年8月4日付）。それに対して先生が、それは違つ、実状はこうだという一文を投書されたが、載せてくれなかつたというお話です。やはり都市へ水を分けてあげた木曾川の宮田用水土地改良区の事務局長さんも、投稿されたが、載せてくれませんでした。



長町 博氏

香川用水土地改良区事務局長

1931年香川県に生まれる。  
三重大学農学部卒業。  
1953年香川県農林部土地改良課へ入庁。  
以来土地改良行政一筋に勤務。  
1989年香川県農林部次長兼土地改良課長を辞し、  
現在、香川用水土地改良区事務局長、農学博士。  
主な著書に『讃岐のため池』（共著、美巧社）  
『古代の讃岐』（共著、美巧社）『農業基盤としての糸里遺構の研究』（美巧社）などがある。

の最小降雨記録を更新した記録的な大水でした。香川県でのこれまでの大水は、1939（昭和14）年の大干ばつが記憶に残っている人が多いのですが、あの濁水は、それをしのぐものでした。ですから、今世紀最大の大水といふことが言えます（注5）。

1939（昭和14）年の大水の時には、稲の収穫皆無の地区が非常に多かつたんです。ところが平六濁水では、稲は平年作を上回りました。そうなりますと、「農業用水には、かなり余裕があるのではないか？」という見方をされる方が都市部の方の中にはおられました。農水省の農業工学研究所では、「あの大水で香川用水は厳しい取水制限を受け、かつ上水道への融通を行ったのに、なぜ稲は平年作を上回つたのか？ 都市部の人達が言つように農業用水には余裕があるのだろうか？ その点を解明したい」と調査にいられたんです。実は、この背景には農家の皆

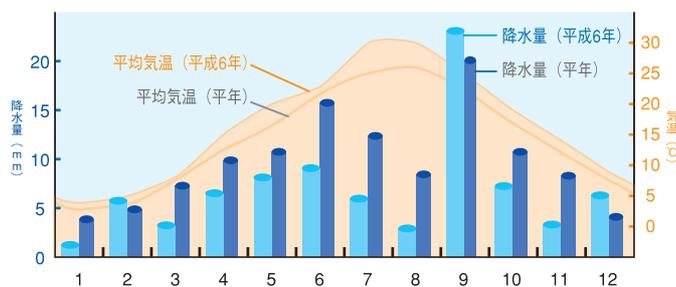
さんの大変な「節水灌漑」があつたのです。香川県の農家は、濁水時にはこのようなことを行つのが何百年来の習慣でして、それは当然だという理解があります。でも農業工学研究所の方に節水灌漑の実情を話しますと「当然とはいへ、それは大変なことだ」とびつくりなさる。香川県の農家の皆さんが当たり前のことのようにやつてることが、実は大変なことをやつていんだなという認識を私自身ももちました。そこへ、たまたま富山先生がお出でになり、ずばりそのことを教えられたんで、本当に嬉しくなつてしまいました。

## 上水道の危機を

## 農業用水が救う

富山 もともと香川県は雨が少ない。そこで満瀬池に代表されるように溜池が発達し、厳しい番水制度もありました。それが、早明浦ダムが出来、香川用水が来ると、市民の水意識もすっかり変わつてしまつた。人間の意識なんて、こつもあっさり変わるものかと、当時ダム建設に苦勞した行政関係者の間で、よく話題になつたものでした。そこへあの濁水でした。大騒ぎになりました。

長町 上水道用水も非常にピンチに陥りました。香川用水の第1次取水制限が6月29日に始まつて、1週間ちよつとで早くも第2次に



(5) 1994（平成6）年の高松市月別気温・降水量（左図）

入って、いきなり60パーセントの取水カットに移行したんですね。香川県民にとって6月の末に取水制限が始まるというのは、平成6年の渇水が初体験だったんです。

60%の取水カットになると、上水道はたいへんな事態になります<sup>(注6)</sup>。しかし、そういう時は農業だってピンチなのです。そこになんとか農業用水、工業用水の協力を仰いで上水道を救済したいということで、県の渇水対策本部から救援要請があったのです。それは農業用水のカット率を重くして、上水道のカット率を緩めるといって、利水者間での融通を配慮した配水調整をお願いしたいということでした。

香川用土地改良区<sup>(注7)</sup>の中でも、これにどう対応するか、随分と議論がありました。農業用水も連日の猛暑干天のため、ため池の貯水量が急速に低下していました。しかし、その段階では、今世紀最大という大渇水になり、この先渇水が延々と続くという予測はなかったですからね。とりあえず上水道はピンチだし、何とか協力しようということで融通に応じたわけです。

ところが、渇水は予想以上に厳しく、長期にわたりました。農業用水もたいへんなピンチです。そこで、農家の人も節水灌漑に努める一方、井戸を掘ったり、ポンプを据えたり、新しく揚水パイプを配管したりと干害応急工事にも積極的に取り組むことになった。このように、利水者間での融通の背景には、農家の皆さんが行なった、採算を気にしない干害

応急工事の実施と節水灌漑があったわけですね。

## 上水道への融通

富山「節水率」といふのがあります。限られた水をどう我慢し合うかの数字ですが、渇水になると我慢をさせられるのは、いつも農業の側ですね。

実は平大渇水の時、愛知用水でこんなことがありました。愛知用水は名古屋市の一部から知多半島全域を潤す水で、水源は木曾川上流のダムに頼っています。が、このとき水源がゼロになった。では知多半島の人たちはどうしのいだからという、木曾川下流の農業用水から分けて貰った。さきにふれた宮田用水です。それも無料です。そのこと一つが農業用水のありがたさを示していますが、真

ったその水を愛知用水内部で、どのように分けあったか。

農水、工水、生活用水の節水率を見ると、一番厳しい季節でしたが、農水65%、工水65%、生活用水33%でした。生活用水最優遇です。

「それは違うのではないか」私はそう、愛知用水の方に申し上げた。都市の人たちにも、そう、講演でお話ししました。

「だって、いまのようにたくさん水を使っている時代、少々の節水で人間は死なない。が、植物は死ぬ。だったら、農業を優先させるのが筋でしょう」と。「ただ、隣の家へはたくさん水が来て自分の家へは来ない、といった不平等では混乱が起きる。水をどう分け合つかという問題、これは非常に大切で、日頃から研究し準備しておく必要がある。が、あくまで都市内部の問題です」と。

渇水の際の節水率は、利根川水系を初めと



富山和子氏

立正大学教授・日本福祉大学客員教授

群馬県に生まれる。早稲田大学文学部卒業。水問題を森林・林業の問題にまで深め、今日の水、緑ブームの先駆となる。また「水田はダムである」という重大な指摘を行ったことでも知られる。著書『水と緑と土』は環境問題のバイブルといわれ、25年間のロングセラー。自然環境保全審議会委員、林政審議会委員、環境庁「名水百選」選定委員、食料、農業、農村基本問題調査会委員など歴任。「富山和子がつくる日本の米カレンダー、水田は文化と環境を守る」を主宰。主な著書に『水と緑と土』(中公新書)、『水の世界史』(文藝春秋)、『日本の米』(中公新書)、『川は生きている』(講談社、第26回産経児童出版文化賞)、『お米は生きている』(講談社、第43回産経児童出版文化賞)、『水と緑の国、日本』(講談社)などがある。

(7) 土地改良区

簡単に言うと、農業水利組合のこと。1949(昭和24)年制定の土地改良法に基づき、それまでの耕地整理組合、普通水利組合に代わって設立されたものを指し、県内に約1500近くある。香川用土地改良区は1968(昭和43)年に設立され、香川用水事業における農業専用区間(59km)の維持・配水管理を行っている。

(8)

この取水制限で、高松市では7月15日(8月15日の間、16時)21時の時間給水に追い込まれた。ちなみに1997(平成9)年の少雨の際には、9月に香川用水からの取水が50%まで制限されたが、減圧給水でしのぎ、断水にはいたっていない。

こも大抵、こんな割合ですねえ。「生命のため」という大義名分が唱えられるのですが、香川用水ではどうでしたか。

長町 香川用水に上水道を依存しているのは5市19町。その内、この用水に100%依存しているのは6町です。全体では、この5市19町の水道需要量の56%を香川用水に依存しています。その香川用水の利用が60%カットされますと、これは大変なことになってくるわけですね。1994（平成6）年の灌漑期間中の香川用水の計画取水量に対する取水量は、全体では65.5%なんです。ところが、農業用水は59.6%、工業用水は45.8%に抑え、上水道は83.3%の取水をしています。この差が融通なんです。

水量としては、そんなにびつくりするほどの数字でもないんです。ただ、融通された水は上水道が本場にピンチの時に効率的に運用

されますから、水量は少なくても効果は抜群なんです。そういう融通を行うことによって上水道がパニックに陥らなかつたんです。

高松市は5時間給水が延々と続いたわけですが、この融通がなかつたら3時間給水に陥っていたに違いありません。3時間給水になりますと水道が減圧してしまい、高松市の半分が断水になるんです。そうなると間違いなくパニックが起ります。ですから、最低5時間給水を維持するために必要な融通を行うという方向で、香川用水土地改良区の配水管理委員会に話をさせてもらったのです。

## 農業用水内部での融通

その代わり、融通したために干ばつの被害が広がったという事態があつてはならない。

そこで、県下のため池の貯水状況、節水灌漑の実施状況、被害の発生状況等をできるだけ正確に把握し、その情報をもとに、本当に困っている地域を救済するための、農業用水内部での融通をやつたわけです。その段階で節水灌漑を充分に行っていない地域には配水を若干控えてもらい、本当にぎりぎりの節水灌漑を行いなおかつ危機的な状況になっている地域には、そこだけ配水量を増やして救援する、そういう配水調整を行いました。

香川用水のすばらしいところは、その幹線水路が香川県の内陸部を東西に走っていて、県下の13河川水系を串刺しにしている点です。このため、香川用水の配水を水系間で調整することによって、受益地域内の水不足の状態を平準化させ、一定地域に被害が拡大するのを未然に防ぐことができます。平六濁水では、その機能を最大限に働かせて、水源供給力の弱いところへ優先配水するという基本方針を貫きました。

## 分水量は権利

### 融通のための説得

富山 農家のみなさん、そんなに簡単に同意されたのですか。

長町 やはり、それは言つは易しくして非常に難しいんです。と言いますのは、香川用水の幹線水路の建設費の地元負担金は、土地改



豊稔池





良区の定款で水量割り7割、地積割り3割で賦課することになっています。水をたくさん使つところはたくさん建設費の負担をしていただいているわけだね。ですから、実際水をたくさん使つところは、「お宅はたくさん水をあげます。その代わりお金をたくさん払ってください。」という負担になっています。したがって、香川用水の幹線水路には農業用分水口が179カ所ありますが、各分水口の期別の分水量は一つの権利になっているんです。それだけのお金を負担していますからね。ですから、無断で私どもの裁量権で勝手に分

水量を変更することはできないんです。これはやはり説得以外にないわけです。「お宅はよそに比べて比較的状况がいいから、危機に陥っている地区を救済するためにバルブを閉めさせてもらえないか。」といった説得です。ですから融通は一見簡単なようで、非常に難しいんです。

そういう融通をしながら一方では、農家の方々に、「節水灌漑を徹底してください。」と申し上げる。節水灌漑をやつて、なおかつ被害が出る状態であれば融通の対象地区にしますが、節水灌漑をしない地区へは「節水灌漑をしてくれないことには救済はできませんよ。」ということになります。でも、そこまで言わなくても、どの地区も節水灌漑をやっていました。

## 節水灌漑

岡山 番水制度は日本中どこへ行っても、実にきめ細かく敷かれていますね。その土地地独特で、文字通り日本特有の水の文化だと思つたのです。が、このときの節水灌漑って、具体的にどういつことをなさつたのでしょうか。長町 ため池の配水ルールは、通常ため池ごとにその受益地域を3ないし5ブロックに分けて、ローテーションを組んで輪番制で順番に水を配水していく。それが番水制です。通常の天候の年には3〜5日という、そのルールに従つて池の水を抜くんです。ところが湯

水になってきますと、3日のところを2日にしたり、5日でローテーションを組むところを4日にしたりする。池の水を抜く日数を短くするわけですね。

各ブロックには「水配(すいはい)さん」がいて、その下に「田子(たご)」がおります(注⑧)。節水になり、配水期間が短くなつてくると、「走り水(注⑨) にしよう」となるわけですね。ですから、1枚の田んぼに配水する時間が短くなり、十分に水を溜めることができなくなるわけです。節水時の配水方法にはいろいろありますが、例えば、田んぼの一番高いところに、竹に白い紙をつけてそれを立てる。一番高いところへ水が届いたら配水を停止して次の田んぼへ移動する。だから田んぼの高さを見間違つて低いところへ印をするとその人は損するわけですね(笑)

## 水配さんの責任

長町 水配さんは通常の年は1人で差配します。平六湯水では3人の水配さんの合議制にして、だいたい水が行き渡つた状態を見て、「もつよがさつ」と3人の意見が一致したら次の田んぼへ行く。

もう一つの方法は、移動式ポンプを使って、水路に堰上げられて溜まつた水を勢いよくポンプアップして田面に走らせる方法です。勢いよく水がバツと飛んで広がりますね。そうすると短時間で田んぼ全体を湿らせること

(8) 水配・田子

水の配水権限をもっているのが「水配」。ため池の配水管理を「池守り」が行い、その下に各ブロックの「水配」、さらにその下に「田子」がいるという配水権限者の階層がある。

(9) 走り水灌漑

田んぼに水を溜めるのではなく、水を田面に走らせて、田んぼを湿らせる程度にしか灌漑しない節水の方法

ができる。

それをさらに一歩進めた方法で、「切り落とし」というのがあるんです。田んぼには水の入口になる「水口」(みなくち)と、田の水を落とす「水落」(みと)があります。水口から水が入って、水落へ水が届くと、「届いたぞ」という合図で次の田んぼへ移動するんです。

水が届いただけで水口を閉め、配水を停止して、次の田んぼへ移動するだけでなく、同時に水落をあけて、入っている水を落とすのです。これはまさに究極の節水灌漑方法ですね。池守(いけもり)さんは権限が強くて、「きょうは何時から何時まで、お前のところは水を抜いてやる」とローテーションを組みます。そうすると、水配さんあるいは水引きさんは、自分の受持ちの田んぼ、例えば5haとか、10ha毎の何百枚かの田んぼに、その時間内に平等に水を配水しないといけないわけです。責任があるわけです。皆さん必死です。終りの方の順番の人は、日暮れが近くなってきて池のユル(注10)を閉められる恐れがある。ところがまだ水は向こうの方にある。「これ一体どうなつとんや、うちまで届かんぞ」といつ心配がありますね。そうなるともう「届いたぞ」といっしょ声が、真に迫るといいますか、声が本当に大きくなるんですよ。そういう緊迫した空気が伝わってくる。全部の水田に配水が終わらなくても、約束の時間がきたら池の取水バルブはピタッと閉まりますからね。その意味では水配さんの責任は大きい。

## 干害応急工事への取り組み

長町 香川県の農家の皆さんは、一度田に植えた稲はどうしても収穫しようとして、採算を忘れて懸命にやりますね。ですから節水灌漑もさることながら、井戸を掘ったり、ポンプを据えたり、干害応急工事をあつちこつちで行いました。業者も手一杯で、特にポンプ関係の業者はもう底をついてしまつて、頼んでも来てくれないですよ。ですから自分でやるわけです。朝4時、5時から起き出して、土方をやつて、農家の皆さん自らの手で工事するんです。井戸を掘ったり、それからパイプを埋設したり、これはもう本当にすごいですね。そういう干害応急工事が県下で8200カ所も実施されています。

富山 湧水のためにですね。

長町 そうなんです。その一例ですが、丸亀にある讃岐富士と呼ばれる山の近くに170haの田んぼが加入している飯野土地改良区があります。そこには既設の井戸が91カ所あり、ポンプをフル運転しました。それに新しく井戸を34カ所掘る一方、揚水機を新しく138台設置しているんです。170haのところでは1億6600万円の干害防止のための工事をやっているんです。

富山 1億6600万円ー

長町 そうです。ここではもう8月初旬に池が空になって、地下水へ移行したわけですね。ところが浅層地下水ですからね。これだけの

ポンプが一斉に水を汲み上げて、田んぼに水をやったら大変なことになる。

富山 水がなくなつてしましますねえ。

長町 水がだんだん細くなつて、中にはもう吸込口が浮いてしまつたりして、揚水できないところも出てきた。そこで土地改良区は総会を開いて、3分の1を犠牲田にして灌漑を中止する。井戸から揚水した水は個人井戸といえども、地区水利組合長の管理のもとに配水する。香川用水からの救援水の配水は理事長に一任し、理事2名を加えた合議によって配水する。盗水があったときはその氏名を公表し、以後の配水は行わない。こういう厳しい掟を定めている。「自分のところのポンプだから、自分のところの田んぼへ入れる」ということは許さんと。地下水は全部、お互い



(10)  
ユル

池の水の出口を開ける栓。この地方では、栓の形がスッポンの頭に似ていることから「スッポンユル」とも呼ばれている。人が抱えている「筆木」を上へ抜くと、穴から水が通じるしくみになっている。(写真左)



平池

長町 約4600戸です。

富山 4600戸。4600戸で1億6600万円  
の負担。補助金なしですか。

長町 いいえ、県が60%補助、その上に丸亀  
市が30%上乘せ補助をしています。それにし  
ても採算は度外視しています。

## 水フニ慣行

長町 香川県では水フニ慣行というのがあり  
ます。讃岐地方では、フニというのは持ち分  
という意味で、「あの人はフニがある」とい  
えば、「あの人は持ち分がある」「すなわち  
「恵まれている」という意味で、「あの田んぼ  
は水フニが多い」といえば、「あの田んぼは  
水の持ち分が多い」ということになります。  
田んぼ1枚1枚ごとに水の持ち分がある、全  
国に例のない特殊な慣行なんですね。

本来、農業水利権は、一定地域の水利組合  
などに所属する農地、または組合員の総有的  
なもので、水利組合の組合員の田んぼの面積  
に応じて平等に共有するのが普通なのです  
が、「ここでは同じため池の水が入る田であり  
ながら、田んぼごとにその水のフニが違つと  
いうのが、この水フニ慣行の特徴なんです。  
ため池の水を均等に分けるんじゃないんで  
す。平等に分けるのではないのです。

ある田んぼはたくさんもらえる、ある田ん  
ぼは少ない。その多少を何で表すかと言つて、  
線香の長さで表す。田んぼの線香の長さを記

した台帳があるわけです。また、時にはこの  
水フニが売買の対象にもなります。線香の長  
い田は値段が高い。この田んぼの水フニが良  
いとなると買いたい人が多くなるわけです。  
そして、地主さんが水フニを全部買い占めて  
しまふ地域も出てきて、「地主水慣行」にま  
でなっていた地区があります。地主さんの権  
限で水を配水するわけです。

富山 なぜ平等ではなく、田んぼによって違  
つたのでしょうか。

長町 最初はね、平等だったんだと思います  
よ。それがやはり力関係の差で、そういう田  
ごとに差が出てきた。

それからもう一つには、新田開発とため池  
の築造が密接につながっています。藩の石高  
が年々上がつていく過程を見ると、新田開発  
が非常に進んだ時期があります。それはまた、  
ため池の数が増えていった過程でもあるので  
す。水の必要な田んぼが新しく増えたから、  
ため池を築くというのが増える原因でした  
し、もつひとつには干ばつや日照り続きから、  
もつと水を安定供給しよう、生産を上げたい、  
収量を増やしたいということでも、ため池を築  
く、いろいろな要因がありますね。

新田開発をする場合は、古田(こでん)の  
水源の上に新しく水田が出来て、それが同一  
水系にありますと、古田と新田の間で軋轢が  
起こります。話し合つのですが、新田はいつ  
しても不利になる。そこで、分水の時間の差  
水フニの差が出るということも考えられま  
す。一つのため池があるとしても、このため

に共通の水だから、これからは、その水は水  
配さんの指図によって配水するということに  
なった。困っているところ、枯れそうなとこ  
ろには優先して配水する、というルールを決  
めたわけです。

富山 それは平成6年の濁水で新たに決めた  
取り決めですね。

長町 そうです。ただしポンプの運転経費は  
改良区で負担したんです。

富山 その170haの中には何戸くべひの農  
家があるのですか。

池の補助水源として、もう一つため池を造るうとする場合に、新しく出来た水をどうやって配分するか。そこで力関係の差が出てくるわけです。

## 線香水

長町 水路に水が来ますね。ある程度水位が高まらないと田んぼへは水が入らない。水路の水位が高まって、田んぼへ水が入り出した瞬間に、拍子木（ひょうしぎ）を叩く。その

音を合図に火を付けるわけです。そして、線香が燃え尽きたら、太鼓を叩くんです。そして、水路に入れた堰板を外して、次の田んぼに水を流す。夜水（よみず）（注11）でしよ、昼夜兼行でやるから線香水は蚊帳をつつてやる。

富山 線香を燃やし配水台帳にしたがって合図をする線香番は、蚊帳の中で行うんですね。合図を聞いた後はどうなりますか。

長町 ちゃんと水引きがついていきますから、水引きが指図するわけです。

富山 大勢で見ているのですか。

線香香水に使われた「配水箱」（写真上）箱の中は二つに区切られ、一方は底が深くなっている。箱の縁に刻まれた目盛りを使って、水利台帳の寸法に合わせて線香を切り、小さな板にびん付け油で線香を立てて燃やした。風の強い日には、底の深い方が使われたという。

線香水について村のお年寄りから話を伺う富山和子氏。（写真左）線香水のお話を下さったのは、長野ヨシノさん・92歳。子育てをしながら男衆に混じって線香水による配水をした経験をお持ちで、貴重な話を伺うことができました。

長町 もう繰出です。配水順番が来てその地区へ水が入って来た時は皆でね。終わって太鼓を叩くと、次の田んぼに水が入る所へ行く。全員田に出ていたわけね。田んぼの持ち主と、水を見ている人と水引きさんがいる。欠席すると水をもらえせん。

富山 線香水はいつ頃始まりいつ頃まで続いたのですか。

長町 「大野録」という古い書物に「寛文12年夏5月、南城にて香の水という事を定む」という記述があるんです。今から326年前に香の水が始まったことを裏づけています。戦後、土地改良事業が進み満濃池（注12）の高

上げ事業が完成した1960（昭和35）年頃から線香水は終息に向かいました。今では水プニの不公平は是正されたものの、線香に代わって時計を使ったりして、その基礎をなす番水（番組）は立派に継承されてきています。平六湯水ではこれが復活して節水に偉力を発揮したのです。

富山 現在ではそういうことを知っている若い人は少ないのでしょうか。

長町 線香水という配水慣行は大変なことなんです。ここらでは大変な事やっていると意識して話して聞きださないと、日常的にやっていた当たり前のことだからと、とりたてて話したがりません。でも、私はいつも驚きをもたなければと思っています。

(11) 夜水  
夜間にも配水すること。

(12) 満濃池  
有効貯水量1540万tを誇る日本最大の農業用ため池。弘法大師が修築したと伝えられる池は1184年に決壊。以後450年間は満濃池がないという空白の時代で、その間に丸亀平野下流部のため池群が完成した。現在の池は、寛永年間（1624～44年）に、生駒藩藩士・西島八兵衛により再築され、その後たび重なる増築を経たものである。

# ヘッドライトがホタルのよう 時間制限による配水の苦勞

富山 ところで、平六濁水に話を戻しましょう。やはり時間制限による配水が行われた地区もあつたのでしょうか。

長町 豊稔池土地改良区では、時計を使っての配水を行いました。時計を置き、旗を立てています。「この田んぼへ今、水が入ってます」という印なんです。番組にしたがつて時間が来ると、次の田んぼへ移動するわけですね。理事長さんが「1日24時間では時間が足らんのです」といつておられました。というのは、どうしても自分のところへ少しでも水を行き渡らそうとしますから、決められた時間をオーバーします。ですから結果として、1日24時間では足らんのですよ。この配水方法ですと、どうしても田んぼ全面に充分に水が行き渡らない。畦(あぜ)の周辺がちよつと高くなつていきますから、そついつとところへは水が行き渡らない。放置しておくとかれますから、自家製のタンク車を使って畦前(あぜまえ)へホースで自分のうちの井戸から汲み上げた水を散水するんですね。水路の水をポンプアップすることは許されせんからね。平六濁水ではこついつとタンクを積んだ車をよく見かけました。

番水制で順番に水を配っていくと、自分のところの田んぼに配水の順番が来た時に本人

がいなくて、欠席すると水がもらえない。ところが兼業農家の方はそんなことを言われたら大変です。

富山 勤めがあるし…。

長町 夫婦で勤めているところはだめなんです。そのために耕作放棄した人が、あちこちにおりました。勤めのために自分の田んぼへの配水時刻に出てこれられない人は「うちは結構です」と最初から水をもらうのをあきらめていた。それほど厳しいときたりであるということを知っているわけです。

また、香川用水の受益地域内で水配さんをしている人で、このままでは共倒れになるというので、自ら自分の田んぼを犠牲にして、みんなに協力を要請するという方もいらっしゃいました。非常に責任感が強いんですね。そこまで水配さんがすると、お互いに譲り合うということになる。

それから、もつと厳しくなつてくると、いわゆる分水、分け股というんですけど、分け股で盗水が起こつたりします。水が盗まれるんです。

富山 一体こつやつて水を盗むのですか。

長町 分水施設がありますね。自分の所へ余計水がくるように、相手側のところへ石を放り込んで、水の流れを阻害しようとする。あるいは水門を勝手に操作したり、堰板を入れたりして、自分のところへ水をたくさん引こつとするわけです。それを防ぐために、分け股に張り番がつくわけです。このため、昼間勤めに出ている人は夜に交代で分け股へ張



満濃池

り番に行く。張り番に行つたり、夜水をしたりに、夜に自分の田んぼへ水を入れたり、あるいは井戸を掘つたり、昼夜兼行での作業になるわけです。平六濁水の最中に、ため池の多い綾南町を夜通つた時、頭に電氣をつけて夜水をやっている人が、まるでホタルが飛び交つているようにみえました。

富山 ヘッドライトをみんな付けて作業している…。この話、印象的で忘れられないのです。こついつした農家の方々の努力が実り、この大濁水もひとまず乗り越えることができたわけですね。でも、こついつことは何も報じられないのですねえ。

# 水の有効利用

## 結局は“節水”と“融通”

長町 大湯水が終わった後、新聞記者が私のところに見えて「長町さん、一体今度の湯水はあなたにとつて何でしたか。そのポリシーを一言で言ってくれ。」と言われまして、私は思わず「節水と融通です。」とお答えしました。

湯水対策は、ハード面では井戸を掘ったり、ポンプを据えたり、という千ばつ防止のための干害応急対策工事であり、ソフト面では節水と融通になると思っんです。私も香川用水土地改良区は、そのソフト面を受け持ったわけです。それに対し記者は「配水調整とか、水利調整とかいう言葉より、融通が一番わかりやすく、ええ言葉や。」と言ってくれました。私もそう言われてみたら、なるほど、融通というのはい言葉だなと思つて。(笑)

富山 私、日本の歴史の中で農民と水との関係ほど、民主的な存在はない、と思つています。古代でも江戸時代でも、明治専制君主の時代でも、中央政府が掌握しようとしてもこればかりは出来なかった。どの程度の湯水の時には、隣の家とどう水を分け合うか。そうした約束事は、その土地土地の人たちの、長い年月の経験から共同して編み出されたもので、共同して守っていく。こんな地域密着型の民主主義はありません。

ですがその融通、農業内部の融通と、農業から都市への「融通」とは、区別して考えないといけないと思います。農業から都市への場合は性質がまったく違つてきます。都市にとつてはありがたいことなのですが。

長町 水を節約して使い、それでも足りない。足りない度合いを見計らつて乏しい水を融通し合う。それが節水と融通です。水の有効利用とは何かということを感じ詰めたら、私は節水と融通だと思ひますよ。香川県の農家の皆さんは昔から水不足に苦しんで、非常な節水灌漑をやつて来たわけです。それが体にしみついていて。ですから、湯水になつて節水を呼びかけますと、非常にスムーズに、協力的に節水に移行してくれるんです。だけど融通には強い抵抗があるんです。これは融通というのは、それが慣習化すると慣行になるからなんです。もっと進んで言いますと、3回譲つたらもう慣行になると言われています。(注10)。

## 現代人が忘れてしまった

### “水とのつきあい方”

長町 水源の早明浦ダムは取水制限をしなかった場合、5年に1回は底をついて使用不能になる。一方、香川用水は10年に1回の湯水でも対応できるだけの施設容量をもつていて。いくら施設容量があつても水源が枯渇し

ては機能を発揮できません。湯水多発の原因は地球温暖化にあると考えられます。地球温暖化はだんだんと進行し、21世紀は絶対に湯水が多発する。

富山 「21世紀の資源は水」と、私は以前から言つて来ましたが、本当にその通りになりました。

長町 1993(平成5)年、米不足の問題があり、緊急輸入をしたりの大騒ぎがあつた。そつした米不足や頻発する水不足という問題は、われわれが今後21世紀社会のなかで、本当に地球市民として環境との調和を保ちながらうまくやつていけるかどうかの試練を与えたと思ひます。

現在、農業用水は需給のバランスを保つていますが、問題は都市用水です。都市用水は水洗トイレ、自動洗濯機の普及など利便性の追求が進んで、使用量はうなぎのぼりでしょう。ダム建設はコスト面、環境面でも限界に近くなつています。日本は雨は確かに多く世界平均の2倍も降るんです。しかし、一人当たりの水量となると5分の1です。しかも雨量は、季節に変動が大きく、台風とか梅雨の時に一時に大量に降るでしょう。だから雨水の利用が非常に難しいんですね。ですから、先生がおっしゃつたように21世紀には水不足がより深刻になることは避けられないでしょうね。

富山 貴重なお話を、ありがとうございます。この話、日本中の都市の皆さんに、いえ農業者の皆さんにも知つていただきたいと思ひます。



(13) このことは、水利組合間での農業用水の融通で言われていることだが、都市に対して融通する場合にも同様に言われている。

# ダムの水源・山村と林業にも目を向けよ

対談を終えて

富山和子

「ご記憶の方もあるでしょう。やはり平六潟水でこんなことがありました。水不足に悩む福岡市が農家に対し、田植えを止めさせ、その水を都市にまわしてくれと、申し入れたのです。「代わり金を払うから」と。」

このニュースはさすがに全国に報道されたものでした。いやしくも水について少しでも勉強した者なら、それは発想だに出来ぬことなのです。というのも、日本人と水との緊密なつきあいとは、弥生時代からのもの。むろん農民の文化です。川を作り替えたのも農民、治水の主役も農民、水とのつきあいの知恵、といっても農民のもの。都市市民と水との関係は、まだ百年の歴史でしかない。

百万都市福岡市が、水の研究者をかかえていないはずはない。それが、こんな提案をするとは、いかに水について分からなくなってしまうた社会か、ということでした。

そればかりではありません。実は農

業が水を使うということは水を作ること。農業は水の利用者であるが、水の生産者でもあるのです。なぜなら、放っておけば海へ捨てられてしまう川の水を、その分大地へ止め置くわけですから。もしも農業が水を使わなくなったら、日本列島は川の水も地下水も確実に減ってしまうのです。

四年前に私はそのことに気づき、そう主張し始めました。この重大なことになぜ最近まで気が付かなかったのかと、私自身驚いているほどです。「水田は水を貯えるダム」ということは、もう四半世紀前の『水と緑と土』の時代から訴えつつけてきて、最近漸く皆さんに理解されるようになってきたのですが。

「融通」のお話は、水とつきあってきた日本農民の知恵であり、美しい伝統でした。それが都市を救う命綱になりました。しかし、農民同士が水を分け合うなら、また大地に返されて水を

養うことになる。井戸を掘っても、また大地に返される。しかしその水を都市が使えば、ただ消費して捨てられ、新たな水資源にはなりません。その分だけ日本の国土は、渴いていくことになる。そこが基本的に違えます。

このことは、都市の私たちも、農民の皆さんも、よく知っておいてほしいと思っております。

最後にもう一つ。水の原点は森林であり、その森林は林業で支えられています。香川用水の水源、早明浦ダムの水も、流域の山村の人たちの懸命の労働で作られています。ダムを土砂の堆積から守っているのもまた、山村の人たちです。

いまその森林も、危機に瀕しています。一見黒々と見える日本列島の山々も、一歩中に入れば崩壊寸前の姿です。木材の自由化による林業の衰退、山村の過疎のおかげです。加えて農業の不振が追い打ちをかけています。

日本は世界に冠たる森林国でした。そのおかげで私たちもこの国土に生を受けられています。いまもダムに水が供給されています。ところがその森林が放棄されつつあるのです。

平六潟水の時、毎朝テレビで「早明浦ダムの水、ただいま何パーセント」と報じられるたび私は、「だから農業を守れ、林業を守れ」という声になぜならないのか、残念でなりませんでした。

大変な犠牲の上に作ったこの巨大ダムの水も、山村が崩壊すれば元も子もないこと、都市の人たちも農業者の皆さんも、十分承知しておかなくてはなりません。

日本の「木の文化」についても、いずれこの誌上でご紹介したいと思えます。ここではその「木の文化」も実は「水の文化」であったこと、その根底にあったのが「米の文化」だったということだけ記しておきましょう。

